

情報プライバシーがインターネット上におけるコミュニケーション行動に及ぼす影響

佐藤 広 英 (信州大学人文学部)
太幡 直 也 (常磐大学人間科学部)

要 約

本研究では、情報プライバシーがインターネット上におけるコミュニケーション行動に及ぼす影響について検討を行った。大学生119名を対象に質問紙調査を実施し、情報プライバシー、インターネット行動について尋ねた。その結果、自伝的情報や属性情報に対するプライバシーは、所属感獲得行動の減少や自己開示行動の減少など、コミュニケーション行動に対してネガティブな影響を与えること、識別情報に対するプライバシーは、所属感獲得行動の増加や非日常的関与行動の増加など、コミュニケーション行動に対してポジティブな影響を与えることがそれぞれ明らかとなった。

キーワード：情報プライバシー、インターネット、コミュニケーション行動

問 題

近年の情報テクノロジーの進展により、インターネット（以下、ネット）を用いて自分の名前、連絡先や過去の記録といった情報を誰もが容易に調べられる時代となっており、プライバシー保護への関心が高まりつつある（総務省、2013）。プライバシーは法学、社会学や心理学などの多くの分野で研究が行われているが、分野や研究ごとにその定義が異なる。心理学分野においては、自己に対する他者からのアクセスの統制と定義されている（e.g., Altman, 1975; Westin, 1967）。

従来 of プライバシーに関する代表的な研究として、個人がプライバシーを確保された状況を志向する程度（プライバシー志向性）に焦点をあてた研究が挙げられる（岩田、1987; Marshall, 1972; Pedersen, 1979; 吉田・溝上、1996）。例えば、Marshall (1972) は、プライバシーを志向する程度を、“親密性”、“近所づきあいの無さ”、“閑居”、“独居”、“匿名性”、“遠慮期待”の六つの下位因子から測定する尺度を開発している。これらのプライバシー志向性に関する研究の特徴として、一人でいたいと思う程度、一人で過ごす時間・空間が欲しいと思う程度など、プライベートな環境への志向性に焦点をあてている点が挙げられる。

一方、情報テクノロジーの進展を受け、情報プライバシー、すなわち個人情報を他者に伝達することを統制しようと思う程度に焦点をあてた研究が近年増加している。そして、情報プライバシーの個人差を測定する尺度が開発されている（e.g., Rosenbaum, 1973; 佐藤、

2011：佐藤・太幡，2009，2013）。例えば，佐藤・太幡（2009）は，日常生活における情報プライバシーを情報の次元（趣味嗜好性，最近過去の経験，所有物，連絡先，外見身体的特徴，価値観）ごとに測定するプライバシー次元尺度（Multi-dimensional Privacy Scale; MPS）を開発している。さらに，佐藤・太幡（2013）は，プライバシーが問題となるネット場面に焦点をあてたインターネット版プライバシー次元尺度（MPS for Internet users；以下，MPS-I）を開発している。MPS-Iは，ネット上における情報プライバシーを，自伝的情報（e.g., 過去の出来事），属性情報（e.g., 性別），識別情報（e.g., 名前），暗証情報（e.g., 銀行口座番号）の四次元に分けて測定するものである。

また，情報プライバシーはネット上における行動に影響を及ぼすことが報告されている（佐藤，2011；太幡・佐藤，2012）。佐藤（2011）は，ネット上におけるプライバシーを維持するための行動（プライバシー対策行動）と情報プライバシーの関連を検討した。その結果，情報プライバシーが高い者ほど，セキュリティ対策や個人情報や他者情報の流出回避などのプライバシー対策行動を多く実施することを示した。また，太幡・佐藤（2012）は，ソーシャル・ネットワーキング・サービスである mixi（ミクシィ）における個人情報公開と情報プライバシーの関連を検討した。その結果，属性情報や識別情報に対する情報プライバシーが高い者ほど，現住所や職業などの個人情報の公開範囲が狭く，プロフィール欄における内容の表出性が低いことを示した。

このように，情報プライバシーはネット行動に対してさまざまな影響をもつことが報告されている。一方，ネット上における他者に対するコミュニケーション行動全般に対する情報プライバシーの影響についてはこれまで検討されていない。佐藤（2011）は，情報プライバシーがネット行動に両面的な影響を与える可能性を指摘している。すなわち，情報を統制することはプライバシー侵害の予防というポジティブな側面につながると同時に，他者に対する警戒を強め，対人コミュニケーションの抑制というネガティブな側面にもつながる可能性を指摘している。しかし，この点は実証的に検討されていない。

以上を踏まえ，本研究では，情報プライバシーとネット上におけるコミュニケーション行動の関連について検討することを目的とする。ネット上におけるコミュニケーション行動の測定には，藤・吉田（2009）のインターネット行動尺度を用いる。この尺度は，ネット上におけるコミュニケーション行動を包括的に測定することができるという利点がある。本研究により，ネット上における情報プライバシーの影響の一端を明らかにすることができると共に，ネットの安全かつ適切な利用方法に関する示唆が得られると期待される。

方 法

調査対象者

大学生119名（男性56名，女性63名）を対象とした。平均年齢は19.10歳（ $SD = 1.16$ ）であった。調査対象者に対して講義中に質問紙を配布し，無記名の形で回収した。

調査時期

2012年4月に実施した。

調査内容

質問紙は(a)~(c)で構成された。(a)情報プライバシー：佐藤・太幡（2013）のMPS-Iの26項目を用いた。それぞれの個人情報をネット上の匿名の不特定多数の人にどのくらい知られたくないかを、「1. 知られてもよい」から「4. 知られたくない」の4件法で回答するよう求めた。なお、MPS-Iは、自伝的情報11項目（例：悩み事、過去の出来事）、属性情報8項目（例：性別、職業）、識別情報4項目（例：本名、会社や学校名）、暗証情報3項目（例：クレジットカードの番号）の4因子で構成される。(b)インターネット行動：藤・吉田（2009）のインターネット行動尺度33項目を用いた。インターネット行動尺度は自己の表出、他者との関係、現実とのバランスの3尺度9因子から構成される。具体的には、自己の表出に関する「自己演出4項目（例：場面にあわせて、いろいろな役割を演じている）」、「自己開示4項目（例：ありのままの自分について話している）」、「自己客観視4項目（例：自分について、客観的に考えたり感じたりすることができる）」、他者との関係に関する「所属感獲得4項目（例：グループの中で、仲間意識を感じることができる）」、「対人関係拡張4項目（例：いろいろな世代の人とも、知り合うことができる）」、「攻撃的言動3項目（例：ネット上でなら他人の悪口を言いやすい）」、現実とのバランスに関する「没入的関与4項目（例：ネットと日常の境目が、あいまいになることがよくある）」、「依存的関与3項目（例：他にしなくてはならないことがあっても、つついネットをしてしまう気がする）」、「非日常的関与3項目（例：ネット上では、日常生活でのストレスを解消できる）」である。各項目について、普段のネット利用の中での自分の行動としてあてはまる程度を、「1. あてはまらない」から「5. あてはまる」の5件法で回答するよう求めた。(c)ネット利用状況：一週間あたりのネット利用日数（単位：日）および1日あたりの平均ネット利用時間（単位：時間）に回答を求めた。

結 果

記述統計量

MPS-I、インターネット行動尺度については、各因子を構成する項目の得点の平均値を算出し、各因子の得点とした。なお、各因子の得点は、得点が高いほど因子の特性が高いことをあらわす。MPS-Iの各因子の信頼性係数は、 $\alpha = .76 \sim .91$ 、インターネット行動尺度の各因子の信頼性係数は、 $\alpha = .56 \sim .89$ であった。MPS-I、インターネット行動尺度の各因子の得点の平均値と標準偏差および α 係数をTable 1に示した。

また、ネット利用状況については、一週間あたりのネット利用日数は $M = 5.23$ ($SD = 2.19$, $Med = 7.00$)、1日あたりの平均ネット利用時間は $M = 2.30$ ($SD = 1.50$, $Med = 2.00$)であった。

Table 1 MPS-I, インターネット行動尺度の記述統計量

	<i>Mean</i>	<i>SD</i>	<i>α</i>	
1. MPS-I				
自伝的情報	3.14	0.68	.91	
属性情報	2.26	0.78	.89	
識別情報	3.45	0.65	.76	
暗証情報	3.97	0.21	.78	
2. インターネット行動尺度				
自己 の 表出	自己演出	2.29	1.00	.84
	自己開示	3.07	0.99	.74
	自己客観視	3.17	1.02	.81
他者 との 関係	所属感獲得	2.80	1.05	.87
	対人関係拡張	3.46	1.18	.89
	攻撃的言動	2.62	0.95	.56
現実 との バラ ンス	没入的関与	1.75	0.81	.79
	依存的関与	2.50	1.27	.85
	非日常的関与	2.49	1.18	.85

情報プライバシーがネット上におけるコミュニケーション行動に与える影響

情報プライバシーがネット上におけるコミュニケーション行動に及ぼす影響を検討するため、インターネット行動各因子の得点を目的変数とした階層的重回帰分析を行った。Step 1には統制変数として、性別（男性=1，女性=2），年齢，1日当たりの平均ネット利用時間を投入した¹。これらの変数は、従来の研究において、インターネット行動との関連が指摘される変数である（藤・吉田，2009；佐藤・太幡，2011）。続いて、Step 2にはMPS-Iの自伝的情報，属性情報と識別情報を投入した²。階層的重回帰分析の結果をTable 2に示す。

その結果，自己演出，自己開示，自己客観視，所属感獲得，対人関係拡張，非日常的関与の各因子において決定係数の有意な増加が見られた。情報プライバシーの影響に関する主な結果は以下の三点にまとめられる。(a)自伝的情報にプライバシーを感じる程度が高い者ほど，自己客観視行動，所属感獲得行動や対人関係獲得行動が少なかった。(b)属性情報にプライバシーを感じる程度が高い者ほど，自己演出行動や自己開示行動が少なかった。(c)識別情報にプライバシーを感じる程度が高い者ほど，所属感獲得行動や非日常的関与行動が多かった。

¹ ネット利用日数は、全体の52%が「7日」と回答していたことから、ここでは1日当たりの平均ネット利用時間をネット利用状況の変数として用いた。

² MPS-Iの暗証情報因子は、平均値が理論的最大値（4点）に近似しており、標準偏差が小さいため、天井効果が見られたと判断される。そこで、暗証情報については階層的重回帰分析から除外することとした。

Table 2 階層的重帰帰分析の結果

説明変数	自己の表出						他者との関係						現実とのバランス					
	自己表出		自己客観視		所属感獲得		対人関係拡張		攻撃的言動		没入的関与		依存的関与		非日常的関与			
	Step1	Step2	Step1	Step2	Step1	Step2	Step1	Step2	Step1	Step2	Step1	Step2	Step1	Step2	Step1	Step2		
性別	.08	-.04	.20*	.12	.15	.16	.23*	.09	-.09	.06	.05	-.13	-.15	-.08	-.12	.05	-.01	
年齢	.04	.04	.03	.01	-.03	-.03	-.04	-.04	-.07	.09	.09	-.08	-.09	-.04	-.06	-.03	-.04	
ネット利用時間	.34***	.33***	.22*	.12	.09	-.04	.29**	.32***	.25**	.13	.11	.27**	.22*	.39***	.34***	.36***	.27**	
自伝的情報	.17		-.13		-.36**		-.43**		-.42**		-.09		-.12		-.03		-.23	
属性情報	-.35**		-.39**		-.16		-.08		.17		.01		-.11		-.23		-.21	
識別情報	.21		.19		.11		.33**		.01		.02		.09		.08		.27*	
R^2	.14**	.20***	.10**	.24***	.03	.20***	.14**	.27***	.21***	.04	.04	.08*	.11*	.15***	.19***	.13***	.21***	
ΔR^2	.06*		.14***		.17***		.13**		.10**		.01		.03		.04		.08*	

注1：表中の値は標準偏回帰係数 (β) を示す。

注2：* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

考 察

本研究の目的は、情報プライバシーとネット上におけるコミュニケーション行動の関連について検討することであった。本研究で得られた結果について考察する。

情報プライバシーがネット上におけるコミュニケーション行動に与える影響

階層的重回帰分析の結果、情報プライバシーがネット上におけるコミュニケーション行動に与える影響について、大きく三つの点が明らかとなった。第一に、自伝的情報へのプライバシーが高い者ほど、自己客観視行動が少なく、所属感獲得行動が少なく、また、対人関係獲得行動が少なかった。すなわち、過去の出来事のような私的な情報に対するプライバシーは、自分について客観的に考える行動を抑制するとともに、友人・仲間を獲得したり、さまざまな世代の知り合いを作るといった新たな関係構築に向けた行動を抑制することが明らかとなった。関係構築の抑制については、佐藤（2011）の指摘と同様であり、情報プライバシーが対人コミュニケーションの抑制というネガティブな影響をもつことを示唆するものである。また、Altman & Taylor（1973）の社会的浸透理論によると、自己開示の内面性は他者との関係性の指標であり、親密な相手に対してより多くの内面的な自己開示が行われるとされる。自伝的情報は他の情報と比較して内面的な情報であることから、自伝的情報に対するプライバシーは、内面的な自己開示の抑制へとつながり、その結果、他者との親密な関係構築を抑制する可能性が考えられるだろう。さらに、藤・吉田（2009）は、ブログのようなネット上における内面的な自己開示が自己客観視につながると述べている。したがって、自伝的情報へのプライバシーによる内面的な自己開示の抑制が、自己客観視行動の抑制へとつながった可能性が考えられる。以上のことから、自伝的情報に対するプライバシーは、ネット上でのコミュニケーション行動に対してネガティブな影響をもつと考えられる。

第二に、属性情報へのプライバシーが高い者ほど、自己演出行動が少なく、また、自己開示行動が少なかった。すなわち、性別や年代などの他者とのコミュニケーションの基礎となる情報へのプライバシーは、自己開示や自己演出といった自己表出行動を抑制することが明らかとなった。Wallace（1999）は、ネット上における第一印象の形成において性別・年齢が重要な情報源となり、対人認知に大きな影響を与えると指摘している。また、佐藤（2012）によると、ネット上における他者の属性情報の匿名性は、コミュニケーションの困難さや不安感を高める効果があるとしている。このように、属性情報はコミュニケーションの基盤となる情報であり、最も内面性の低い自己情報であると考えられる。したがって、属性情報に対するプライバシーは、コミュニケーションの基盤となる情報を含む、すべての情報公開の抑制へとつながり、その結果、自己表出行動が抑制されたものと考えられる。自己表出行動の抑制は、対人コミュニケーションの抑制につながることから、属性情報に対するプライバシーは、ネット上でのコミュニケーション行動に対してネガティブな影響をもつと考えられる。

第三に、識別情報へのプライバシーが高い者ほど、所属感獲得行動が多く、非日常的関与が多かった。すなわち、名前や住所などの個人を特定できる情報に対するプライバシーは、

仲間を獲得する行動やネットを日常生活とは異なる役割として利用する行動を促進することが明らかとなった。総務省（2012）は、個人情報流出などのプライバシー・リスクを理解していることを、青少年のインターネット・リテラシー指標の一つとして挙げている。また、佐藤（2011）によると、識別情報へのプライバシーが高い者は、犯罪被害へのリスク認知が高く、個人情報漏洩や誹謗中傷などの被害経験が少ないとされる。このことから、識別情報へのプライバシーは、ネットを安全に利用する上で非常に重要な側面であり、一種のリテラシーであると考えられる。このようなリテラシーを有する者は、日常では出会えない友人・仲間を獲得する場としたり、日常のストレスを解消する場とするなど、ネットを適切かつ有効に利用することができると考えられる。以上のことから、識別情報に対するプライバシーは、ネット上でのコミュニケーション行動に対してポジティブな影響をもつと考えられる。

一方、ネット上のコミュニケーション行動のうち、攻撃的言動、没入的関与、依存的関与に関しては、情報プライバシーとの関連がみられなかった。したがって、情報プライバシーは、誹謗中傷のような攻撃行動、ネットの世界に没頭・依存するような関わり方といった、ネット上の問題行動とされる側面には影響を及ぼさないと考えられる。藤・吉田（2009）は、日常生活における居場所のなさや攻撃的言動、没入的関与、依存的関与を促進させることを示している。また、Davis（2001）は、ネット依存の背景には、ネット利用の在り方だけでなく、社会的孤立などの状況要因や抑うつや対人不安などの精神病理的問題が存在すると述べている。このように、ネット上の問題行動に対しては、情報プライバシーよりもむしろ社会的孤立などの状況要因や対人不安などの個人特性が重要であると考えられる。

本研究の貢献と今後の展望

本研究の貢献として、ネット上における情報プライバシーがコミュニケーション行動に与える影響について、自伝的情報や属性情報に対するプライバシーが所属感獲得行動の減少や自己開示行動の減少といったネガティブな影響を与えること、識別情報に対するプライバシーが所属感獲得行動や非日常的関与行動の増加といったポジティブな影響を与えることを明らかにした点が挙げられる。したがって、本研究の結果から、ネット上における情報プライバシーの影響の一端を明らかにすることができたと考えられる。

一方、今後の展望として、ネット上におけるコミュニケーション経験が情報プライバシーに与える影響を検討することが挙げられる。本研究では、情報プライバシーがネット上におけるコミュニケーション行動に影響を与えるというプロセスを仮定し、階層的重回帰分析を用いて検討を行った。しかし、実際には、ネット上におけるさまざまなコミュニケーション経験が、情報プライバシーに影響を与える可能性も考えられる。Petronio & Durham（2008）によると、自己情報の公開は、自他で共有されたプライバシー境界に応じて調整されると位置づけられている。このことから、ネット上でのコミュニケーション経験が、プライバシー境界の捉え方に影響し、その結果、情報プライバシーに影響を与える可能性が考えられるだろう。本研究は一時点での調査であるため、上記のプロセスを検討することができないことから、今後はパネル調査を基にこのプロセスを検討する必要があると考えられる。

引用文献

- Altman, I. (1975). *The environment and social behavior: Privacy, personal space, territory, crowding*. Monterey, CA: Brooks/Cole.
- Altman, I., & Taylor, D. (1973). *Social penetration: The development of interpersonal relationships*. New York: Holt, Rinehart, & Winston.
- Davis, R. A. (2001). A cognitive-behavioral model of pathological internet use. *Computers in Human Behavior*, **17**, 187-195.
- 藤 桂・吉田富二雄 (2009). インターネット上での行動内容が社会性・攻撃性に及ぼす影響——ウェブログ・オンラインゲームの検討より——社会心理学研究, **25**, 121-132.
- 岩田 紀 (1987). 日本人大学生におけるプライバシー志向性と人格特性との関係 社会心理学研究, **3**, 11-16.
- Marshall, N. J. (1972). Privacy and environment. *Human Ecology*, **1**, 93-110.
- Pedersen, M. D. (1979) Dimensions of privacy. *Perceptual and Motor Skills*, **48**, 1291-1297.
- Petronio, S., & Durham, W. T. (2008). Communication privacy management theory. In D. O. Braithwaite, & L. A. Baxter (Eds), *Engaging theories in interpersonal communication: Multiple perspective*. Thousand Oaks, CA: Sage. pp. 309-322.
- Rosenbaum, B. L. (1973). Attitude toward invasion of privacy in the personnel selection process and job applicant demographic and personality correlates. *Journal of Applied Psychology*, **58**, 333-338.
- 佐藤広英 (2011). インターネット利用者のプライバシー意識に関する研究 季刊「社会安全」80号, 22-29.
- 佐藤広英 (2012). CMCにおける他者の匿名性がコミュニケーション行動に及ぼす効果——情報の種類の観点から——社会言語科学, **15**, 17-28.
- 佐藤広英・太幡直也 (2009). プライバシー次元尺度作成の試み(1) 日本社会心理学会第50回大会・日本グループ・ダイナミックス学会第56回大会合同大会発表論文集, 524-525.
- 佐藤広英・太幡直也 (2013). インターネット版プライバシー次元尺度の作成 パーソナリティ研究, **21**, 312-315.
- 総務省 (2012). 青少年のインターネット・リテラシー指標 [指標開発編]
<<http://www.soumu.go.jp/iicp/chousakenkyu/data/research/survey/telecom/2012/ilas2012-report-build.pdf>>
- 総務省 (2013). 平成25年度版情報通信白書
<<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h25/pdf/index.html>>
- 太幡直也・佐藤広英 (2012). SNS 上での個人情報公開を規定する要因——自己情報へのプライバシー意識の観点から——日本パーソナリティ心理学会第21回大会発表論文集, 150.
- Wallace, P. (1999). *The Psychology of the Internet*. New York: Cambridge University Press.
- Westin, A. F. (1967). *Privacy and freedom*. New York: Atheneum.
- 吉田圭吾・溝上慎一 (1996). プライバシー志向性尺度 (本邦版) に関する検討 心理学研究, **67**, 50-55.

The effects of the concern about information privacy on online communication behavior

Hirotsune Sato (Faculty of Arts, Shinshu University)

Naoya Tabata (Faculty of Human Science, Tokiwa University)

Abstracts

The present study investigated the effects of the concerns about information privacy on online communication behavior. 119 undergraduates completed a self-administered questionnaire contained the Multi-dimensional Privacy Scale for Internet users (MPS-I) and the scale for measuring online communication behaviors. Results indicated that the concerns about their privacy for autobiographical and demographic information had negative impact on interpersonal communication, such as the decrease of acquirement of belongingness and the decrease of self-disclosure. On the other hands, results also indicated that the concerns about their privacy for identifiable information had positive impact on interpersonal communication, such as the increase of acquirement of belongingness and increase of diverting commitment.

Key words: information privacy, Internet online communication behavior

(2013年10月31日受理, 12月6日掲載)

